



カスタネット通信2月号で、2022年に言語聴覚士(ST)が初診でお会いした方々の“主訴”について書きました。今月号では「聴覚障害」「構音障害」「言語発達遅滞」に続いて、4番目に多かった「聴力検査」を主訴に受診したお子さんに実施した『乳幼児の聴力検査』について、詳しくおはなししたいと思います。

## 聴力検査を受けるきっかけ

お子さんが聴力検査を受けるきっかけの多くは次の4つです。

### ① 新生児聴覚スクリーニング検査

出生後数日以内に産科で受ける検査です。この検査で“要精査”となると大学病院などの耳鼻咽喉科を紹介され、さらに詳細な聴力検査を受けることとなります。新生児聴覚スクリーニング検査の結果は母子手帳に添付されているはずなので、確認してみてください。



### ② 乳幼児健康診査

3歳(半)児健診などでは健診会場でしっかりとした聴力検査を行うのではなく、家で行う簡単な検査の結果や、保護者が聞こえの心配を訴えた場合に、協力医療機関に聴力検査を依頼するという形で行われます。

### ③ 家族の心配

「あれ？聞こえてないのかな？」と家族が心配して耳鼻咽喉科を受診する場合があります。“ことばが出てこない”ということから難聴が見つかることもあります。子どもは何か夢中になっていると音に気づきにくいですし、音への反応も反射など大人とは異なることもあり、聞こえているのか聞こえにくいのか、判断が難しいことが多々あります。そのため、乳幼児の場合はどこの耳鼻科でも検査ができるわけではありません。後述する乳幼児聴力検査ができる病院を調べてから受診する必要があります。

### ④ 他施設からの紹介

かかりつけの小児科や保育園・幼稚園・療育施設の先生から耳の検査を受けてきたら？と勧められて受診する場合があります。滲出性中耳炎で聞こえが悪くなっている可能性もあるため、聞こえが気になる場合は受診をお勧めします。

## 聞こえの発達

音がした方を振り向く、というのが音への反応のイメージですが、3～4ヶ月の赤ちゃんの音への反応は反射です。そのため音の方にサッと振り向かなくても全く問題はありません。どれくらいの月齢でどのような音への反応があるか、知っておくことが大切です。田中美郷先生がまとめられた『乳児の聴覚発達チェック項目』(ネットで検索すると出てきます)を参考にされるのも良いと思います。このチェック項目が母子手帳に掲載されている市区町村もあるようです。





# 乳幼児聴力検査



大人が受ける聞こえの検査を標準純音聴力検査と呼びます。狭い聴力検査室にひとりで入り、ヘッドフォンをして、音が聞こえたらボタンを押す検査です。これは乳幼児には難しいので、次に示す子ども用に工夫した検査を行います。

## ① 聴性行動反応聴力検査(BOA)

音に対する子どもの反応(主には反射)を観察する検査です。太鼓やラッパ、鈴などの楽器音やインファントオーディオメーターという機械から出す音を聞かせ、反応の有無を調べます。



## ② 視覚強化式聴力検査(VRA)、条件詮索反応聴力検査(COR)

音に対する振り向き反応で、聞こえを評価する検査法です。スピーカから音を出し、子どもが振り向いたら動画を見せる、ということを経験し、どれくらい小さい音まで振り向くかを調べます。VRAでは1つ、CORでは左右2つのスピーカから音を出します。



## ③ ピープショウテスト、遊戯聴力検査

音が鳴ったらボタンを押す、ビー玉やコインを箱に入れるなど、音への自発的な反応を用いる検査です。大人の検査と方法は似ていますが、音への反応に対し動画が見られるなどのご褒美(ピープショウテスト)があったり、反応自体が楽しい作業(遊戯聴力検査)である点が子ども向けです。

これらの検査はオギジビで実施できますが、お子さんは緊張したり検査を怖がることもあるため、1回で信頼性のある結果が出ない場合もあります。そのような場合、間をあげずに何回か検査を繰り返したり、脳波での検査ができる病院を紹介することもあります。聴力検査によって難聴が見つかったら、補聴器の要否を検討するなど、次のステップに進みます。

# 園芸家12か月



院長からある会社の情報誌をもらって読んでいます。毎号「だし」「仏像」など特集が組まれているのですが、最新号で気になったのはその特集記事ではなく、チェコの作家カレル・チャペックの「園芸家の一年」の話が出てきた、檀ふみさんの連載エッセイです。カレル・チャペックといえば「紅茶」のイメージでしたが、どうやらこの作家の名前から取ったようです。エッセイを読んで間もなく、書店に立ち寄ったら「園芸家12か月」が大々的に紹介されていました。中公文庫創刊50周年の記念イベントだったようです。偶然にしてはできすぎていないか?と思ったのですが、檀さんが書いていたものとはタイトルが異なる(出版社が違う)ため、やはり偶然のようでした。少し迷いましたが、購入し読んでみることにしました。書店では「元祖沼活」と紹介されていたが、庭の植物のことが気になって旅行が楽しめなかったり、土作りに執着する園芸家の生態がとても面白く書かれていました。



エッセイは檀さんが引き出物のカタログギフトでホースを注文したというお話だったのですが、私はつい最近カタログギフトで剪定ばさみを注文しました。窮屈そうだったポインセチアの植え替え、徒長したカランコエの剪定、完了しました。

